

設定した言語活動を通して育てたい力

○ 音楽の仕組み(問いと答え)を生かして、演奏を工夫することができる。

思考力、判断力、表現力の育成

- ◇ 学年 第6学年
- ◇ 題材名 豊かな表現を求めて
- ◇ 本時の目標 ジャズの雰囲気を生かして、答えの部分を思いや意図をもって工夫する。
- ◇ 学習の流れ (5時間目/全6時間)

学習活動	指導上の留意事項 (◇) (◆「努力を要する」状況と判断した児童への指導の手立て)	評価規準〔観点〕 (評価方法)
<p>1 ウォーミングアップをする。 ○ 問いと答えゲームをする。 教師→児童 (全) 教師→児童 (個) 児童 (個) → (全)</p> <p>2 全員で合奏し、本時のめあてを確認する。 ○ 問いと答えを意識し、主にミとレを使って2小節のアドリブを工夫することを知る。</p>	<p>◇裏拍で手拍子をし、2拍子を感じながら歌ったり、演奏したりするように声をかける。</p> <p>◇前時までに学習した「6年3組の技」(ジャズの雰囲気に合うリズムを子どもの言葉で表現したもの)を活用できるように意識付ける。</p>  <p>◇前時までに学習したことを生かして合奏させ、アドリブを入れたい箇所を根拠をもって判断させる。</p> <p>「問い」を意識して、「答え」のリズムをつくらう。</p>	<p>各自の演奏後、「A君はどの技をつかったの?」と発問し、表現したリズムを子どもの言葉で確認させましょう。</p> <p>★リズムを子どもらしく置き換えた言葉感受した雰囲気を言語で表現したものであり、児童が表現の工夫をする上でのアイテムとして活用することができます。</p>
<p>3 パートごとに演奏を工夫する ○ 答えの部分を一人一人がつくってから、パートで一つの演奏に高める。</p>	<p>◇それぞれの演奏の工夫やよさについて、パートリーダーを中心に伝え合いながら工夫させる。</p> <p>◇どの技を組み合わせるかで表現するか、実際に音を出しながら試行錯誤させる。</p> <p>◆一人で作ることが難しい児童には、友達の演奏に感想を言わせたり、友達と一緒に演奏したりすることで演奏の感覚を共有させる。</p> 	<p>・ジャズの雰囲気を生かしていろいろと試しながら音楽を工夫し、どのようにするかについて思いや意図をもっている。 〔音楽表現の創意工夫〕 (発言、演奏、ワークシート)</p>
<p>4 パートごとに発表し、その効果について意見交流する。</p> <p>5 本時のまとめをする。 ○ それぞれのパートのアドリブをつなげて演奏する。</p> <p>6 本時の振り返りをする。</p>	<p>◇各パートの演奏の工夫を聴き取る視点として、リズム(6年3組の技)強弱や速度の変化などを示す。</p> <p>◇教師は、各グループの演奏を板書として記譜しながら聴き、児童の発言内容を全体で確認する際に活用する。</p> <p>◇意見交換したことを、もう一度、実際の演奏を通して確認する。</p> <p>◇どのような思いや意図をもって工夫したかについて振り返らせる。</p> <p>ジャズはリズムを裏拍でとる音楽なので、「しゃっくり」を使ったところがこの曲にあったアドリブになっていました。</p> 	<p>言葉だけで話し合うのではなく、実際に音を出して確かめ合いながら工夫させましょう。</p> <p>★個々の思いや意図をグループや学級全体の思いや意図に高めていく過程で協同する喜びが生まれます。また、どのように演奏したら曲想を生かした演奏になるのかを試行錯誤することが、音楽における思考力の育成につながります。</p>

設定した言語活動を通して育てたい力

○ 声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して、よりよい表現を追求することができる。

思考力、表現力の育成

- ◇ 学年 第3学年
- ◇ 題材名 「合唱の喜び～曲のしくみを理解して表現しよう～」
- ◇ 本時の目標 テクスチャアに着目し、それぞれの声部をどのような声の音色、強弱、言葉の発音で歌ったら全体の響きがよりよくなるかを感じ取って曲にふさわしい表現で歌う。
- ◇ 学習の流れ（8時間目／全9時間）

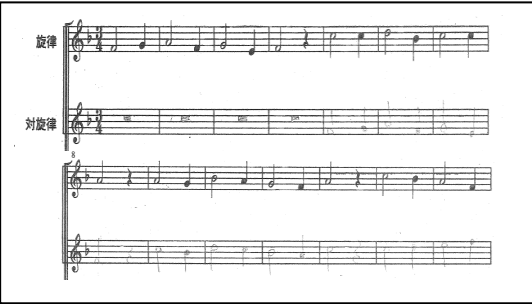
学習活動	指導上の留意事項（◇） （◆「努力を要する」状況と判断した生徒への指導の手立て）	評価規準〔観点〕 （評価方法）
<p>1 歌詞を音読し、合唱する。</p> <p>2 本時の目標を確認する。</p> <p>3 A部分の副旋律をどのように歌うとよいかについて発表する。</p> <p>4 3つのパートごとにA部分の歌い方を試行錯誤する。</p> <p>5 パートごとのA部分の歌い方を生かして全体で1番を合唱し、録音する。</p>	<p>◇フレーズごとに言葉の発音を意識させながら、教師の音読に続けて生徒に音読させる。</p> <p>◇視線を指揮者に集中させ、アカペラで歌わせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>Aの音の重なりを理解し、響きのある合唱をしよう。</p> </div> <p>◇A部分には A部分からの変化や B部分への盛り上がりといった効果があることを思い出させる。</p> <p>◇目指す副旋律の歌い方に近付けるための具体的な手立て（言葉の発音、呼吸法、姿勢、音色）を前時までの学習から想起させる。</p> <p>◇生徒から出なかった点について教師が補足しながら、各パートの工夫の視点を明確にもたせる。</p> <div style="text-align: center; margin: 5px 0;">  </div> <p>◇各パートの状況を把握し、生徒の表現意図を生かした表現ができるように助言を行う。</p> <p>◇音程が安定している場合は、アカペラで歌わせる。</p>	<p>録音を聴かせる前に、生徒が着目すべき要素等を必ず示しましょう。</p> <p>★着目する要素を示すことで、自分の担当する声部と他の声部との役割を理解して聴くことができるのと同時に、全体での話し合いも深まります。</p>
<p>6 録音を聴き、どのように歌うかについて話し合う。</p> <p>○ 録音を聴きながら楽譜にメモをとり4人グループで話し合い、全体の場に出す。</p> <div style="text-align: center; margin: 5px 0;">  </div>	<p>◇録音を聴く前に、テクスチャアに着目して、それぞれの声部をどのような声の音色、強弱、言葉の発音で歌ったら全体の響きがよりよくなるかを聴き取るとを話す。</p> <p>◆複数の要素等に着目して聴き取れそうにない生徒については、どれか1つを示して聴かせる。</p> <p>◆テクスチャアに着目できない生徒には、自分のパートの工夫点を評価するように伝える。</p> <p>◇出された内容をパートごとに整理して板書する。</p> <p>◇実際にパートで歌いたいという生徒の希望があれば、時間をとる。</p>	<p>生徒から出た意見をパートごとに、各要素等に沿って整理し板書しましょう。</p> <p>★板書することで、話し合いで出された生徒の表現意図を生かして、7につなげることができます。また何をどう表現するのかを生徒自身が明確にもつことができます。</p>
<p>7 どのように歌うかについて全体で確認し、1番を合唱する。</p> <p>8 全曲を通して合唱する。</p> <p>9 本時の振り返りをする。</p>	<p>◇板書を確認し課題意識をもたせて全体で合唱させる。</p> <p>◇本時のまとめとして学習したことを生かして合唱させる。</p> <p>◇Aの部分についての表現の工夫について振り返らせる。</p>	<p>・他の声部の役割や表現意図を生かした合唱表現をするために、必要な技能を身に付けて歌っている。〔表現の技能〕（行動観察）</p>

設定した言語活動を通して育てたい力

○ 音の重なり方によって生み出される表情の多様さに気づきながら、副次的な旋律をつくることができる。

思考力、判断力、表現力の育成

- ◇ 科目 音楽 I
- ◇ 学年 第 1 学年
- ◇ 題材名 中世ヨーロッパの音楽に親しもう
- ◇ 本時の目標 中世ヨーロッパの音楽の特徴についての理解を深め、思いや意図をもって副次的な旋律をつくる。
- ◇ 学習の流れ（4 時間目 / 全 5 時間）

学習活動	指導上の留意事項（◇） （◆「努力を要する」状況と判断した生徒への指導の手立て）	評価規準〔観点〕 （評価方法）
<p>1 既習曲を聴く。</p> <p>○ 古楽器による演奏曲『エステンピー』を聴く。</p> <p>2 本時の目標を確認する。</p>	<p>◇中世ヨーロッパの音階の特徴を想起させるとともに、ポリフォニー（多声）音楽の技法（完全四度や完全五度の並進行、斜進行や反進行）について板書で確認する。</p> <p>中世ヨーロッパの音楽の特徴を生かして、対旋律をつくろう。</p> <p>◇自分がつくった主旋律に合わせて、音の重なり、音色、リズム、旋律、テクスチュア等に注目しながら副次的な旋律をつくることを確認する。</p> <p>◇音楽をつくる技法として、板書した事項を活用させる。</p>	<p>グループ活動では、「旋律と対旋律を同じリズムにして素朴感を出そう。」「完全四度だけじゃなく完全五度を入れると変化が感じられて面白いね。」等、生徒の思いや意図、感受した内容を交流させましょう。</p>
<p>3 4～5名のグループに分かれて副次的な旋律を工夫する。</p> <p>○ アルト・リコーダーで実際に音を出し、音の重なり方を確認しながら、副次的な旋律をつくる。</p>	<p>◇即興的に音を出しながら、演奏を工夫させる。</p> <p>◇グループリーダーを中心に可能な部分は記譜させる。</p>  <p>◇グループの表現意図を記譜等に反映できるように必要に応じて助言等を行う。</p> <p>◆表現意図をもちにくい生徒がいる場合は、音の重なり方によって生み出される表情の多様さについて、グループ内での意見を参考にさせる。</p>	<p>★生徒同士が交流し合うことで、音楽を形づくっている要素の働きに改めて気付くとともに、創作する楽しさや喜びを感じるようになります。</p>
<p>4 いくつかのグループの演奏を聴いて、工夫された点についての気づきや感想を発表する。</p> <p>5 学習のまとめをし、次時の見通しをもつ。</p> <p>○ 自分たちの作品の聴きどころを各自でワークシートに記述し、次の時間にさらなる工夫をする意欲を持つ。</p>	<p>◇音の重なり方に工夫がみられるグループを紹介する。</p> <p>◇板書した要素（音色、リズム、重ね方）や手法（完全四度、完全五度の並進行、斜進行や反進行）のキーワード等を使って発表させる。</p> <p>◇4で工夫した内容を中心に記入させる。</p> <p>◇次時では、低音や即興的な演奏等を加えて、さらに作品を工夫することを知らせる。</p>	<p>・音色、旋律等を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気を感じながら、音の組み合わせを考えて副次的な旋律を付け、表現したい音楽をイメージして音楽表現を工夫し、どのように音楽をつくるかについて表現意図をもっている。〔音楽表現の創意工夫〕（行動観察、演奏、ワークシート）</p>